

農山村移住者の働き方をめぐる選択

——ライフコース・パターンの解明に向けて——

早稲田大学

畑山直子

1. 背景と目的

本報告の目的は、農山村移住者が働き方を選択するプロセスを、ライフコース論の視点から明らかにすることである。これまで、比較的年齢の低い人たちによる都市から農山村への移住は、「脱サラ」や早期退職の選択といった、従来の主流の働き方からの逸脱の物語として理解されてきた。しかし、1990年代以降、標準的なライフコースを支える諸制度が弱体化し、居住地や働き方を選択する意味が大きく転換している。この転換によって、都市から農山村へ移住することは、多様な働き方を選択することとほぼ同義になりつつあるといえるだろう。すなわち、農山村移住は、主流の地域移動や働き方に対する「外れ値」ではなく、ライフコース選択の一つとして捉えることができるのである。

では、農山村へ移住する人たちは、「働くこと」をどのような営みとして捉え、移住先での働き方をいかにして選択していくのか。本報告では、農山村移住者の移住前と移住後における就労の実態を考察し、彼らが働き方を選択するプロセスを明らかにしていく。そして、この分析結果を、今後農山村移住者のライフコース・パターンを解明していく際の足がかりとしたい。

2. 方法とデータ

本報告では、報告者が沖縄県沖縄本島北部（2006年～）および埼玉県秩父地域（2012年～）で実施している農山村移住者を対象にした生活史調査のインタビュー・データを用いる。調査対象者を1965-1979年出生コーホート（グループ1とする）と1980-1994年出生コーホート（グループ2とする）の2つに分け、それぞれの移住前および移住後の就労の実態を分析する。

3. 考察と結論

グループ1は、学卒後、一般企業等に就職するものの（初職）、数年で退職し、そのあとに国内外で長期にわたる旅を経験している者が多かった。この長期滞在の経験が農山村への移住を検討することにつながり、その後移住資金を蓄えた上で移住に至っている。移住後は農業従事者や自営業者となったケースが多い。初職を退職する経緯はいくつかのパターンがあるが、グループ1は「主流の働き方からの逸脱」という従来の説明と一部で重なっていることを指摘できる。

一方で、グループ2では、学卒後に移住先で初職に就いた者がみられた。就職活動と移住の検討をほぼ同時に行ったのである。この初職とは、地方公務員や総務省の地域おこし協力隊など地域づくりを担当する仕事が含まれている。学卒後にどのような働き方をしたいかを検討した結果、都市部での就職を選択しなかったということである。さらに、地域おこし協力隊等の任期が終了したあと、第二職として地元企業や団体へ就職していくというグループ1とは異なる特徴があった。

参考文献

Benson, Michaela and O'Reilly, Karen. 2009, "Migration and the search for a better way of life: a critical exploration of lifestyle migration", *The Sociological Review*, 57(4): 608-625.

Giddens, Anthony. 1991, *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*, Polity Press.
=2005, 秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳『モダニティと自己アイデンティティ 後期近代における自己と社会』ハーベスト社。

秋津元輝, 2003「Iターンの実践とIターン研究の実践」祖田修監修, 大原興太郎・加古敏之・池上甲一・末原達郎編『持続的農業農村の展望』大明堂。